



夢を夢見る

福田眞人

夢は楽しい。白黒でもカラーでも。何時頃からか、夢を日記につけるようになった。長じて漱石の短編集である『夢十夜』を読むに及んで、夢をしつこく書けばここに至るのかと思わず身憚りしたことがある。豚が坂を駆け落ちる。

落ちは大概、たわいもない。異国を旅していたり、高い崖から叫びながら漕ぎ、山道を越えて峠の向こう側に燦々と輝く湖面を見てうっとりとしている自分には、驚かざるを得なかった。それは、ほんの半年も前に日記に書いていた情景に他ならなかったからだ。なぜそんな確信を持てるのか？

それは、その湖面の漣のような輝きの中にすっと立っていたゴシック風の教会堂の塔があまりに鮮明だったからだ。後にそれが滋賀県の虎姫町にあるヤンマー・ディーゼルの会長が寄贈した建物だと分かって、いささか狼狽した。ドイツで学んだ彼が、故郷に贈った公民館だった。

私は、怖くなった。怖くなったから、すぐ大学の心理学研究室を尋ねて、その助手に滔々と訴えた。脚を組んで聞いていた助手は、それからやおら「君は、自分を天才と信じたいと思ってるでしょうね」と尋ねた。喫驚した私は、困って訊きに來ている学生をこんな風にもてなす学者はきつと三流だと思った。「そうですね、きつと勘違いですよ、そんな莫迦なことがあるはずありませんよ」と逃げを打って、私はすぐその部屋を後にした。

それから私は、誰にも、両親にも姉にも、将来結婚する女性と二人の子供を連れて高原の牧場で日盛りの日を浴びながら目を細めていた私の話を止めた。遠いインドの国で、象に乗る話もやめた。ローマ時代から続くハルシュタットの塩鉱の中を滑り降りる話も止めた。

全ては夢の中で起こったことだった。私は、夢を夢見ていたのである。

(ふくだ まひと)

たまゆらの夢

林 良児

マラルメは、凍てつく湖に足を捕らえられて立ちつくす一羽の白鳥にわが身を譬えた。かぶりを振れば、一瞬、苦しみは和らぐ。しかし、厚く硬い氷の恐怖を振りはらうことはできない。朝の冷気が退いて陽が輝きはじめるたびに、今日こそは氷を引き裂いて飛び立とうと奮い立つ。しかし、羽ばたきはむなしい。飛翔を許されることもなく寒空の下に追放されたままの白鳥の姿は心に沁みて痛ましい。

われわれが生きる時間は二つの虚無のあいだにふるされた瞬間の連続であるという。一つの瞬間が虚無から生まれるためにはそれに先立つ一つの瞬間が虚無に飲みこまれなくてはならない。出現するやいなや過去となってゆく瞬間は同心円を描くようにして暗い深淵に沈んでゆくのだろう。それはやがてその瞬間を生きた人間の足下に時間の残滓としてうず高く堆積し、自由な身動きを阻害するようである。

そのような無慈悲な時間の外に逃れざるをいかに多くの詩人が求めてきたことだろう。或る者は時の重みを感じないためにはつねに酔っているなければならないといひ、また或る者は無意志的に甦った過去を再び生きていることによつて時間の不可逆性を超越することが可能であるという。それにしても、よりよきもののために生まれたのだと声高にこみあげてくる心のかの呼び声が聞こえてくることは少なく、ことあるごとにあれこれと思ひ悩むことばかりが多いのはなぜなのだろう。「おかしい……、なにがあったのか」。病室のベッドで点滴に繋がれていたせいだろうか。

ボードレールが語る皮肉な陶酔も、ブルーストが求める真の実在も、シラーが鼓舞する精神の気高さも、すべてがうろたえて私を解けるはずのない思考に誘う。「このままでいいのだからか」。しかし、自身の存在をめぐる混沌とした迷路から抜け出すことは叶うべくもない。私は、たまゆらのさだめなき夢を置き去りにして現実に戻りた。

(はやし りょうじ)

あの男

伊藤達也

セーヌ河からサンミッシェル大通りを下り、一本細い道を入ったところにある古本買取所で、私は日本に持つて帰っても邪魔になるだけの本を処分しようと考えていた。緑色のチョッキを着た若い男の店員は、積み上げられた本のうちにピエール・シェローの『ガラスの家』の写真集を見つけると、小さな声を上げ、かなり高額の買い取り価格を提示した。私が、もうフランスの銀行口座を開くので、現金で支払って欲しい、と言うと、奥にいた女性の同僚と相談に入り、その同僚は、お友達でフランスに銀行口座を持つている人はいませんか、その口座を使えませんか、と提案する。いえ、現金が必要なのです、と私はバリ滞在の最後に身に付いてきた図々しさを主張した。不意に「趣味が良いね」と隣のブラスにいた男が私に声をかける。髪の毛はさばさばのポヘミアン風の男で、なるべくこの手の男とはかわりあいにほならないほうが良いことを、この都市での滞在経験から学んでいた私は「どうも」と短く礼を言うにとどめるが、その瞬間、男が売ろうとしていた本が目に入る。男はまだ新品同様の同じ本を数冊まとめて売ろうとしているようだった。横目で表紙のタイトルを読むと、「夜想曲」という文字がかわらうじて読み取れる。日本を離れる前に話題になっていた『インド夜想曲』かと思ひ、著者名を見るがタブッキとは書かれてはおらず、チルドがついていてフランス語としては読めない名前だった。

結局若い店員が、この本は現金でも買い取るべきだ、と言い張ってくれたこともあり、予想以上の金額を一年前から欧州で流通し始めた新紙幣で受け取ることができた。横を見るとポヘミアン風の男は、小切手で代金を受け取って帰国した。私は何も言わず外へ出た。

日本に帰国し十数年経ち、ロベルト・ボラーニョの『チリ夜想曲』が日本語で出版された時、不意にあの男のことを思い出した。翌年にこの世を去るボラーニョが、初の仏訳が出た二〇〇二年に何らかの理由でパリに来ていたという可能性がないわけではない。写真のボラーニョとの類似を判断できるほどにはその時の私の記憶は鮮明ではない。もちろん、本人以外の誰かが、ボラーニョの本をまとめて売りに来ていたということもありうるだろう。そしてまた、その記憶自体が、空腹と、定まらない将来への不安に堪え兼ねていた私の見た白昼夢であることも十分あり得るのだ。(いとう たつや)

三聖人を夢に

鶴飼尚代

昨今は「夢」を抱いて生きていないと、抱負のないダメな人のようにみなされる。だが、定年退職を半年後に控えた身、夢を抱くのはむずかしい。だからといってダメな人になるのはあまりに口惜しい。悔しいので、そもそも立ち返り、「夢」と向きあうことにした。

現象としての夢を心理学的に、あるいは脳科学的に分析する力など私にはないので、語源を遡ってみた。「語源由来辞典」によれば、「ゆめ」の語源は「いめ」で「い(寝)」は「睡眠」、「め(目)」は「見えるもの」の意、このことで、平安時代頃から「ゆめ」に転じ、「はかなさ」など種々の意味で比喩的に使われるようになったそうだ。「将来の希望」という意味で使われ始めたのは近代以降だというのだ。そうか、近代以降の「夢」にしがみつかなくても、伝統的「ゆめ」とともに、という向きあい方もあるではないか。

孔子は長らく周公旦の夢を見ていないと嘆いた(久矣、吾不復夢見周公〔論語〕述而第七)。以前は夢で敬愛してやまない周公旦にお目にかかっていたということだ。この章は孔子の周公旦に対する思慕の念をよく示すと解釈されている。つまり、孔子のごとく思慕の念を強くすれば、孔子より五百年以上前に生きた偉人にさえ夢で会えるのである。

が、しかし、現代人の私はここでしばし立ち止まる。万一、私が夢で周公旦にお目にかかるという榮譽に与ったとしても、その周公旦は孔子の夢の周公旦と同一人物と言えるのだろうか。つまり、夢に登場する人物は夢見る人の想像力によって形成されているであろうから、周公旦像に大きな違いがあり、私の周公旦は薄べらな偉人になりかねない。憧れの偉人に会いたいのなら、その人のことをよく知ることが肝心。知れば知るほどお目にかけられなくなる、そういう人物に夢で会えたら感激さわりばりない。

それにしても、孔子が夢で周公旦に会えなくなったのは何故か。その章の冒頭に「わたしもすっかり年老いてしまった(甚矣吾衰也)」とあるところから、加齢による体力低下が要因らしい。定年退職後、孔子と老子と釈迦とを夢にお招きして、食事会などを催し、至福の時を過ごせたらと強く願っているが、体力強化も含め準備に追われそうである。

(うかい なおよ)

夢という劇場

野谷文昭

自分が気に入っている素材を何度でも再利用するのはボルヘスの特徴のひとつである。だから同じモチーフを持つ作品が複数存在することも珍しくない。このことは夢についても当てはまる。ボルヘスの読者なら、様々な機会に莊子の夢、コールリッジの夢などの引用に出くわしているはずだ。そんなひとつにイギリスのエッセイスト、ジョゼフ・アディソンによる夢についてのエッセイがあり、ボルヘスは「夢の本」や「七つの夜」などでそれに触れている。ペトロニウスやゴンゴラにも同類の表現が見られるというそのエッセイの要点は、「夢を見ている時、人間の精神は肉体を離れ、それは同時に劇場であり、俳優であり、さらに観客でもある」（堀内研二訳）というものだ。この一七二二年に述べられたアディソンの言葉は、僕が夢を見るときの、夢と夢を見る主体としての僕との関係をうまく言い表している気がする。

たとえば、小学生のときに手首を骨折し、全身麻酔による手術を受け、その最中に見た夢というのがある。一度目は麻酔から覚めてしまい、二度目の試みのときにこんな夢を見た。僕は南海の孤島にいて、夕日が沈むのを見ている。暑い。するとあるうことか水平線からその真っ赤な夕日が昇りはじめののだ。同時に土俗的な歌が聞こえ、呪文のような言葉の繰り返しが木霊する。ここで勝手に解釈すれば、麻酔が切れかけ痛みを感じたことが暑さや赤い太陽の原因だろう。呪文は医師の声だ。だが歌は解釈を拒む。イメージの連鎖から生まれたのだろうか。

繰り返して見る悪夢でも同じことが言える。夜、今はない路線の電車で出かけるとなぜか見知らぬ駅で降りるはめになり、人気がない街を歩き回る。そのうち駅を見失い、なんとも心細い思いをするのだが、いつの間にか帰りの電車の中にいる。ところがその電車は目的地に行かない。僕はこのカフカの悪夢の劇場の登場人物であり、それを見る観客でもある。分析すれば、何がしかの因果関係がつかめるのかもしれない。しかしその必要はない。なぜならこの悪夢は再演されていることがわかり、ときどきしなながらも楽しむことのできる魅力的な作品だからだ。次にこの劇場が現れるのはいつだろう。

(のや ふみあき)

おもちゃやさん

松山洋平

年少組のときだったか、年中組のときだったか、あるいは年長組のときだったかもしれない。幼稚園に通っていたある日、教師から紙を配られて、自分の「将来の夢」を書くよう命じられたことがあった。課題を課せられた同級の園児たちは、嬉々として自分の夢を書きこんでいった。男子のあいだでは、仮○ライダーや戦隊もののようなヒーローだとか、「おもちゃやさん」「おかしやさん」などの職業が人気だったように思う。

わたしはと言えば、これといった夢をまったく持っていなかった。幼稚園児の自分が、いつか、いまの自分とは別の何者かになるのだとは露ほども思っていなかったからだ（要するに、ほけつとしていてなにも考えていなかったのである）。

もちろん、ほかの子と同じように仮○ライダーや戦隊ものは好きだった。しかし、それらはあくまでテレビで視聴して楽しむ対象だった。そもそも、自分がそうだった存在に「なる」という可能性に思い至ったことがなかったように記憶している。玩具や菓子もやはり人並みに好きだったが、だからと言ってそれらを販売する「おもちゃやさん」や「おかしやさん」になりたいと考えたことはなかった。

いったい何を書けばよいものかと、ひどく困った（とくになし）とでも書いておけばよかったわけだが、幼稚園児なので、そこまで頭が回らなかったと言うか、語彙を持っていなかった。

悩んだ末に結局なにも思いつかなかったわたしは、苦し紛れにとりの子の回答を盗み見て、その子のまねをして「おもちゃやさん」という文字を自分の紙に書き写したのを覚えていてる。

(まつやま ようへい)

夢すなわち芸術作品

ライアン・モリソン

先日、僕の日本文学の授業において学生から良い質問があった。「芸術作品とその歴史的背景は如何なる関係にあるか」という問いであったが、僕は「夢とその題材となる現実世界に於ける経験の如きものである」と答えた。そして「作品は歴史を単に反映するのではなく夢の場合と同様現実を歪め表すもので歴史の症状として捉えるべし、森鷗外『山椒大夫』はその顕著な例となる」と説明した。

僕は夢と芸術作品（小説にせよ映画にせよ）をほぼ同じ類いのものとして見なしている。ここで言う芸術作品とは特に寓話（アレゴリー）のことを指すが、夢も芸術作品と同じ方法で解釈することができると考えている。つまり内容を顕在的内容と潜在的内容の二種類に分け、顕在的内容から潜在的内容を抽出してゆくのである。

例えば夏目漱石『夢十夜』（一九〇八）を扱った授業では、例えば「第七夜」において西へ向かう汽船に表れるように、この作品は当時の近代日本のアレゴリーとして読み得ることを確認した。さらに、フロイト「夢の解釈」（一九〇〇）を参考に読み解き、例えば「第三夜」において夢に現れる「子供」は何を象徴し、その父の過去の罪とどのような関係にあるのかということと議論した。そして最後に、学生達に実際に見た夢を書き起こしそれを解釈するという課題を出したが、自分の夢の潜在的内容を自ら発掘するという試みはなかなかおもしろい経験となったようである。

芸術作品が歴史を歪んだかたちで反映していることは、いわゆる純文学に限る話ではない。例えば二〇〇〇年以降のハリウッド映画を見てみるとその多くが世界終焉的なテーマを取り上げているのが分かる。隕石の落下、宇宙人による攻撃、猿や動物による復讐としての人間の殺戮。どれも突飛で幻想的な題材にせよその多くの映画の顕在的内容の裏には我々現代人たちが普段日常生活において抱えている不安や懸念が潜んでいる。日本はいつ米国の戦争に巻き込まれるのか、地球温暖化がどのペースで進めば我々の子孫は地球上で生存することが出来なくなるのではないか、AI開発によりどのような危険が待ちかまわされているのか。そういった現実的な課題が多岐にわたる映画において象徴が置き換えられている。夢が個々の無意識を反映するように、芸術作品は集団の無意識を反映していると言えらるだろう。現実世界を理解するためには夢や芸術作品の理解は不可欠なのである。

（もりそん らいあん）

夢と形而上学

佐藤亮司

私は哲学を専門にしているが哲学と夢といえばやはり「私は今夢を見ていないとなぜ言えるのか?」と言ったような懐疑論的な問いであろう。もし夢と現実が区別できないとしたら、私は現実の世界についての確実な知識を一切持つことができないように思われるのだ。この問いに対する常識的な回答は、夢と現実の間にある様々な違いに訴えるものだ。例えば、夢では草野球でもエラーをする……といった具合である。しかし、そう言った識別可能な通常の夢ではなく、それなりに一貫性を持った出来事が生じる、決して醒めない「夢」を我々が見ているという可能性はないのだろうか。映画『マトリックス』の世界のように、人類は皆機械に繋がれて偽りの世界の醒めない「夢」を見せさせられているということはないのだろうか。

しかし哲学者のデイヴィッド・チャーマーズは、このようなシナリオは懐疑論的なシナリオではないと論じる。詳細な論証はここでは省くが、彼によれば、そのようなシナリオでは「夢」の世界は偽りの世界ではなく、もはや一つの立派な現実であり、また別の世界は「夢」の世界と対立する現実ではなく、いわば一段階上にある別の現実なのだ。このような結論は直観的には受け入れ難いかもしれない。しかし考えてみれば、宗教的世界観においては、今の人生がより大きな世界の構造の一部にすぎないことはよくある。現世での人生を経てあの世に行きまた別の世界に行く輪廻転生的な世界観においては、現世の観点からは世界の本当の姿は言う方がい知ることではない。しかしだからと言って、現世での経験や知識が偽りのものになるわけではないのである。このように考えると、「夢」の思考実験から引き出すべき結論は、我々は世界についての知識を持ってないかもしれないという認識論的なものではなく、現世の我々には知ることのできない世界の「本当の姿」というものがあるかもしれないという形而上学的なものだろう。

（さとう しょうし） りょうじ

よく見る夢

今泉景子

幼少期、昼寝をすると必ずある夢を二つ見て、怖くなって泣いてしまっていた。一つは寝ている私の上を大きな石が転がってきて押しつぶされそうになるという夢だ。今でもそのシーンを思い浮かべると、恐怖感がある。二つ目は、ピラミッドのような空間に、宙に浮いて理想してきている夢である。これらの夢は本当によく見たので、機会があれば夢診断をしてみたいと思うこともある。もしかして、前世に関係あるのか。それらの夢は、大人になるといつの間にか見ることはなくなっていた。

社会人になってからよく見る夢のシリーズが二つある。まず「何かに追われるシリーズ」である。誰かに追いかけれ、急いでドアを閉め、鍵をかけて安堵するという夢である。恐らくいつも「あれをやらなくては、これもやらなくては」と追われている気持ちも反映されているのだと思う。二つ目は「職業シリーズ」である。グランドスタッフ時代によく見ていた夢は、遅刻する夢である。これはグランドスタッフになると必ず見る夢だと思う。この夢は何度見たことか！ 現実が遅刻してしまった時は、パニックで夢か現実か分からなくなったものだ。その後、教員になってからは、授業の為に教室へ入ったら、必死で勉強している学生の姿を見て、テストの日なのにテストを作成することをすっかり忘れていたことに気がつき、焦るという夢を見る。夢の中の自分はとても冷静で、「今、慌てても仕方がない。これは口頭で出題して、回答を記入してもらおうしかない！」とやりだすので、笑ってしまう。

特に仕事の夢を見るようになる。その思いや考えが潜在意識に到達しているということ、そこでやっと一人前だと、教えられたことがある。見る夢によって、自分の今の状況を客観的に知る事ができるようになるのかもしれない。よく見る夢は、恐怖感を伴うものが多かったが、これからは「楽しい夢シリーズ」を期待して、床に就いていきたい。

(いまいずみ けいこ)

夢なんて見ないよ。

高瀬淳一

基本的にリアリスト・タイプなので、不可能なことは不可能なのだろうと割り切ってしまう。私はこの原稿を北海道で書いているが、当然、野生のヒグマと手をつないで仲良くダンスしたいなどとは、夢にも思わない。絵本や物語の中にそういう「夢のような話」が出てくることはかまわないが、やはりまず子どもに教えるべきはヒグマの恐ろしさだろう、などとリアルを考えてしまう。現実には小説よりも奇なり、と思っただけで社会を見つめる学問をしているためか、現実離れた夢物語を聞いても、残念ながら私はあまり感動しないのである。

また、私は「夢がなかった」というときの「夢」も見ない。かなうのであれば、それは「夢」ではなく、「実現困難に見える目標」にすぎない、と思うからである。実際、たとえ不可能に思われても、具体的な目標ならば、達成に向けた手段を考えて実行し、幸運に恵まれるためのチャンスを広げていけば、少なくとも部分的にはかなえることができるだろうと思ってしまう。「夢のマイホーム」などと言うのは自由だが、私はそれを「夢」とは思わない。

とはいえ、さすがの私も、眠っているときには、しばしば夢を見る。ただし、この「夢」も私は大事にはしていない。

学生の頃、フロイトの夢解釈(Träumdeutung)に興味を持ち、夢とは潜在的に心の問題処理を行う作用であると得心した。ならば目覚めてからの処理過程を振り返って、自分にはどんなストレスがあったかを確認するのは、せっかく消したストレスを再び呼び起こすようなものではないかな。というので、私は前夜に見た夢をできるだけ思い出さないようにしている。

ということで、夢も希望もない人生を送ってきた私だが、「おまえの夢を語れ」というのがこの原稿依頼の趣旨のようなので、あえて一言述べておこう。私の夢は世界共生！(笑)

(たかせ じゅんいち)

「夢」と訳してはいけないアボリジニの 「ドリーム・タイム」

濱嶋 聡

まず、この「ドリームタイム」「ドリーミング」について、その語源の一つとされる「ジュクルバ」を紹介する。ジュクルバ (Jukupa) とは、ウルル・カタジュタ (Uluru-Kata Tjuta) 国立公園地区に暮らす、アボリジニの一部族、アナング (Anangu) にとっての一種の神話体系である。国立公園内のカルチャーセンターのメッセージには、ジュクルバはアナング文化の基盤であり、「行動の決まり、集団生活の掟を決めるもの」で、「部族の存在の支えとなる、土地を管理する方法を定めた規律である」と述べられている。したがって、これを「ドリーミング」「ドリームタイム」と訳すことも適切ではなく、西洋的な意味でのドリーミング (夢の世界) については触れられていない。その内容は、現実に基づいたものであり、夢の世界のような想像的なものでもなく、日々の生活を送るための掟を記した、古代から伝わる部族の規律でもあると記述されている。(Puklpa Pitjama Ananguku Ngurakutu Pukal Ngaka Yanama Ananguku Ngurakutu) 「この何もない存在しない世界から、アボリジニの祖先があらわれ、各地を旅し、動植物や砂漠などの地形を作った創世記の話や、精霊、虹の蛇 (Rainbow Serpent) の話は、南オーストラリアのランミンジェリ (Raminjery) 部族、ヌガジュリ (Ngadjuri) 部族、ガーナ (Kaurna) 部族など、部族によって大変よく似ていたり、異なっていたりする箇所がある。それは、各部族の住む地域、神話の中に出てくる各自の役割、規律の違いによるものである」と答えてくれたアデレードのベッドフォード・パーク (Bedford Park) にあるガーナ文化センター (Living Kaurna Cultural Centre) のアボリジニ女性講師は、「他の部族の神話を自分が語ることは適切ではない」とも述べているが、このことは、彼女がセンターへの訪問者に神話について話をする時にも、少なからず影響を及ぼしていることでもある。(拙著『アボリジニであること』第1章6、神話による「アボリジニ式教育」と「ドリームタイム」名古屋外国語大学出版会) より)

(はましま さとし)

二〇〇七年十月に見た「父殺し」の……

亀山郁夫

死んだ母の夢をよく見る。十日に一度の割合だろうか。母は、一九八四年六月、私がモスクワで在外研修中に死んだ。だから、通夜にも葬儀にも出ることはできなかった。そのせいで、私の母の思い出には、区切りとゆうか節目と呼べるものがない。母の最期に立ち合った姉に訊いても、夢は見ないという。「おまえは果報者だね」。末っ子で母の愛情に十分に与えなかった私に果報者の意識はない。母の背中を見ながら、人一倍母思いの子どもが育った。世にいう、典型的なマザコン人間なのだ。

深夜、喉の渴きを覚えて眠りから覚め、冷蔵庫の中をのぞく。喉を心地よく潤してくれそうなドリンクは何もない。仕方なく水道の蛇口に手を伸ばしたところでふと、隣りの三畳間にもう一つ小型の冷蔵庫があることを思いだした。目の前の障子を開けて部屋に入り、冷蔵庫を開ける。こちらには、赤紫、深緑、黄の三本のポリタンクが縦にきれいに収められている。そのうち赤紫の一本を取りだして口につけた。一瞬、饑えたような嫌なおいが鼻をついた。そこで記憶がよみがえった。その液体は、私が何十年前も前に殺した人間の血なのだ。ところが、夢のなかの私に、私が殺した肝心の相手の顔が思い浮かばない。しかしともかくも証拠隠滅を図らなくてはと、三本のポリタンクの中身を慌てて窓から裏庭にぶちまけた。と突然台所と続きの障子が空いて、母が顔を出した。

「ああ、それね、母さんも飲んでみたけど、腐っていたよ」

東京・日仏会館で行われた国際シンポジウムの席で私はこの夢を披露し、同じパネリストで精神分析学者の新宮一成氏に夢判断をお願いしたことがある。私の提案を歓迎する拍手が会場内にパラパラと起こった。新宮氏は、私の「夢語り」に謝意を表した後、静かな口調でこう断じた。

「腐った血を口にするという行為にシンボリックに示されているのは、『父殺し』です」

(かめやま いくお)

Lucid Dreaming

Juanita Heigham

It began like this. I was watching a live musical in a grand and lavish theater. The colors of the set and the costumes were too vibrant to be real, and they seemed to change with the pulsing of the music and the movement of the dancers. The entire effect was both spellbinding and energizing. There was a hypnotic pause in the music and the lead singer sang out my name and invited me to the stage. I froze for a self-conscious moment, and then realized I was in a dream. I thought what a wonderful opportunity to sing and dance on stage, so fully aware that I was dreaming, I stood up and went to the stage. I whirled and swirled with the dancers and leapt high across the stage, at times suspended, at times soaring and floating like a bird in flight. Throughout the dancing, I chose each move because I was conscious within the dream. It was incredible. It was also not unusual. I was having a lucid dream.

Lucid dreaming has been a topic of interest and amazement going back at least to Aristotle in ancient Greece. The term lucid dream was first used in a scholarly publication in 1913 by Dutch psychiatrist Frederik van Eeden. He described lucid dreaming as dreams that the dreamer knows they are having. Modern research from the late 1960's to the present

has explored the different aspects and levels of such dreams.

Some lucid dreamers experience low-level lucidity and know they are dreaming but they cannot control much of their own action within their dreams. They may be able to fly but cannot take themselves to a particular destination. Others experience high-level lucidity, and they know dreaming and can completely direct the flow of the dream and choose to fly to the moon, stand in a campfire, crawl inside an anthill or do anything they can imagine.

Research has found that psychological therapies that include training in lucid dreaming can have a number of benefits. For example, studies have shown that people who suffer from nightmares, depression and self-harm have been helped through combining different therapies with lucid dreaming training. These successes show the lucid dreaming can make valuable contributions to mental health, but it is also true that it can be a lot of fun for the person experiencing it. For myself, dancing and flying across that flashy, pulsating stage was an exhilaration I have not had while awake, and I would happily do it all again.

(ハイアム ワニータ)

Dreaming about Dreaming

Yukiko Mishina

The word "dream" has multiple meanings. The first definition always coming up in my mind is the dream we have at night while we sleep. According to scientists, this "dream" organizes all of the information that we gather throughout our busy day: while dreaming, the brain carefully arranges and files it away as memories and processes the emotions attached to those experiences. Our dreams string together various unrelated pieces of information, leaving us to question why our dreams often don't make much sense when we try to recall them in the morning. Perhaps there's no point in deciphering these seemingly disorderly dreams.

Yet how closely are our dreams related to our experiences during the daytime? Interestingly enough, before the existence of color TVs, people used to dream more often in black and white. Nowadays people report dreaming in color a majority of the time, suggesting that our experience during the day shapes our dreams when we sleep at night.

Despite technological advancements, however, there seems to be no clear scientific consensus behind the meaning of our dreams, but sharing our dreams and trying to decipher what our dreams mean is a fun and often serves as a light-hearted topic of conversation.

This poses a slight challenge for me. As much as I'd like to keep such conversations going, I usually don't remember my dreams. In fact, I only remember a few of my dreams a year, probably because I wake up at the wrong time. I do wonder why some people can remember their dreams clearly enough to even keep a dream diary. This personal conundrum makes me question whether it could be due to the lack of another type of "dream," the one that we have for our future. I don't recall having very many of those dreams when I was younger. In grade school I had only a few things to write about my dreams for the future. I now daydream about whether these two dreams could be related. If I dream more for my future now, will I be able to remember more of the dreams I have at night?

(みしな ゆきこ)

Stalker, ou la contrée des rêves de l'homme ?

Yannick Deplaedt

“И это снилось мне, и это снится мне,
Et je l'ai rêvé et le rêve,
 И это мне ещё когда-нибудь приснится,
Un jour le rêverai encore,
 И повторится всё, и всё довоплотится,
Tout se répètera, tout se réalisera,
 И вам приснится всё, что видел я во сне.”
Vous rêverez tout ce que j'ai vu en rêve.

Ces quelques vers sont d'Arséni Tarkovski, un des plus grands poètes russes du XX^{ème} siècle. Il est aussi le père du cinéaste Andreï Tarkovski, l'auteur de chefs-d'œuvre tels que *Stalker*, *Solaris* ou encore Andreï Rublev. On évoque au sujet du père le lyrisme philosophique d'un siècle passé que la grande Russie a oublié, et du fils, je parle de cinéaste de l'ouverture. Pour la simple raison que son cinéma nous invite à de multiples réflexions sans jamais nous donner de réponses.

Stalker, notamment, est un océan de possibilités philosophiques.

Le personnage du *Stalker* s'inscrit dans une tradition littéraire russe évidente. Incarnant une figure christique que l'on rapprochera naturellement de l'idiot à la Dostoïevsky, il nous emmène, à travers des tableaux d'une beauté éblouissante où

la lumière répond à la lenteur, où le silence s'empare du cadre, dans une traversée irréelle. Un chemin de croix merveilleux où la réalité et le monde du rêve, du désir ou du souvenir semblent tous se confondre.

Cette impression d'entrer dans une zone de rêve permanente vient probablement du fait que Tarkovski parvient à réaliser un film de science-fiction sans utiliser aucun des artifices habituels de ce genre. Il crée ainsi une oeuvre genrée mais unique.

« Voilà ce qu'est la Zone. Mais elle est telle que la fait notre esprit. Je ne vous cacherai pas que des gens soient forcés de rentrer bredouilles à mi-chemin. Certains sont morts sur le seuil de la chambre. Mais tout ce qui arrive ne vient pas de la Zone mais de nous ». (*Stalker*)

(ドゥプラド ヤニック)